

か。全体的に、藤木氏は、「村の情念」に導かれて、中世と近世の断絶を強調してきた従来の研究史を批判し、「近世で『村請』の母体となる、自立した村のたしかな原型」(一二九頁)を中世村落の中に発見しようとしている。しかし、この様な発見と従来の研究史が明らかにしてきた中世村落と近世村落の違いとは、どの様にしたら統一的に把握できるのであろうか。

最後に、本書で明らかになった事実によって、改めて課題として認識されるようになるであろう点を指摘しておきたい。藤木氏は、近世につながる村のイメージを中世に見出し、それが十四世紀から十五・十六世紀に発生するとの前提をもとに論を立てられている。では、そういった自検断の能力を高める村は、どの様な歴史的背景の中で成立してきたのであろうか。中世後期と近世との連続面が明らかにされたことによつて、それ以前の村落との断絶がクローズアップされるようになるであろう。

紹介  
本書のはしがきで藤木氏は、これは惣無事令の本の子どもの様なものだと述べられているが、この多くの可能性を秘めた「子供」は、今後多くの中世史研究者によつて

育てられていくにちがいない。

(A5判 二六八頁 一九八七年一月  
平凡社 二〇〇〇年)  
(橋本道範 京都大学聴講生)

北岡伸一著

### 『清沢冽』

清沢冽(一八九〇—一九四五)は戦前期の日本における著名な外交評論家であるが、むしろ現在は、太平洋戦争下における日本の社会の病理についての観察や批判をひそかに書きとめた『暗黒日記』の著者として知られている。これは彼が本来専門としていた評論家としての活動を禁止された後の仕事である。彼の本領はそれ以前の活動、殊に外交評論家としての仕事にあるとし、その足跡を辿ったものが本書である。

清沢は一八九〇(明治二三)年、長野県南安曇郡北穂高村の耕作地主の四男一女の三男として生まれた。彼は中学への進学を希望したが父の理解を得られず、近くの私塾をへて一六歳で渡米し苦学の結果アメリカの邦字紙の記者として名をあげることができた。

渡米した一九〇六(明治三九)年はちょうど日本からの移民問題が最初に深刻化した時期である。彼は新聞記者としてその問題に直面する過程において両国が経済的に発展することこそ、問題解決の道であるという認識に到達した。

彼の帰国は一九一八(大正七)年、第一次大戦が終わってアメリカの地位が格段に上昇する時にあたっている。日本において頂点に達していた日米協調論は、同年の第二次カリフォルニア土地法および二四年の排日移民法の成立により、急速に後退していったのであるが、清沢は最初の著作『米国の研究』(一九二四年)において、アメリカの経済力の大きさや社会の特質を論じ、一時的に世論の専制が政治を左右することがあっても、健全な勢力による軌道修正が行われるとの確信を述べた。

かつてその底辺で暮らし、アメリカの長所・短所を心得ていた彼は、情況に流されやすい一般のエリート親米派とは違つた骨太な日米提携論を堅持してゆくののである。

彼が評論家として独立した一九二九(昭和四)年は大恐慌によりアメリカの威信が大きく傷ついた時期であり、これ以後満州

事変、国際連盟脱退、日中戦争と、日米関係は破局にむかつて進んでゆくが彼は一貫して日米戦争回避のための発言を続けてゆく。そのような彼の言論活動は内外の新聞・雑誌から得た豊富な情報と人並みはずれた読書量に支えられたものであった。この研鑽が鋭いリアリズムを生むのであるが、さらにその背後に貫くアイデアリズムの存在を北岡氏は見る。特定のイデオロギーに従属しなかったが故に左翼からも右翼からも批判されながら、すでに時代遅れとされていた自由主義を守り彼は読者に警鐘を打ち続けたのであった。

このようにすぐれた言論人を持ちながら、戦前日本が覚醒できなかったのは何故か。北岡氏は二つの理由を強調しているように思われる。一つは日本のエリートの特権と脆弱である。彼らは大部分帝国大学の卒業生であり、政府と結びついた地位（帝国大学教授・官僚・ビジネスリーダー）について国際関係、国民経済を論じていた。彼らの思考枠にはまず国家と政治（外交）・軍事があり、次に経済があった。それに対して清沢は国際関係の基礎に経済力を置き、国民経済の要求に長期的に合致する方策を

調整するために、いわば二次的に政治（外交）が存在するのであると考えた。このような彼の主張は当時のエリート層から黙殺された。もう一つは無自覚な大衆のあり方と彼らの感情の部分に媚びることのみに傾き政府批判の任務を忘れたリベリズムを欠いた大新聞の責任である。

日米開戦の年に総合雑誌を舞台に評論活動を行うことを禁じられた清沢は、この頃より仕事の主力を日本外交史研究にうつし、『外交史』（一九四一年）および『日本外交史』（一九四二年）など日本外交史の研究を精力的に行い、数々の業績をあげながら敗戦の三ヶ月前、一九四五（昭和二十）年五月に急逝した。

北岡氏は言論人清沢の評論活動の足取りを、その背景となった国際情勢やアメリカ政治への深い理解のもとにいきいきと描いている。同時に随所に国際政治のフレイムワークへの北岡氏の挑戦とさえ解釈できる箇所が散見されて興味深い。たとえば一般に対米英協調外交とされている幣原外交を、当時から清沢は自主外交の美名にかられ英米に抜け駆けするような形で中国に譲歩し列強協調の枠組をくずしたとして根本

的に疑問をもっていたことが本書では積極的に描かれている。

清沢の主張する経済力の発展を重視するなかでの日米英協調、とりわけ日米協調を重んじて日中関係の改善をはかってゆくというフレイムは、彼が一九七〇年代以降の脱イデオロギー時代の国際関係と経済大国になってゆく日本の姿を予言していたようでもあり、北岡氏がその現状をさらに改善するには何がポイントであるかを清沢論を通して論じようとしているようにも思われる。

また北岡氏は、人間清沢像を、苦学の末に身につけた学識を武器に官学出身のエリート達に日米協調の理念を掲げて孤高の戦いを挑む強気的一面と、家族への深い愛情を注ぐ側面の両面から、関係者へのインタビューも含めた十分な史料調査の上で明瞭に描き出している。

これらの点が本書を一気に読ませる魅力となっていると思われる。しかし本書の内容に関し実証ではなく北岡氏の思い込みではないかと異和感を覚える部分も幾つか残る。

その一つは大衆のとらえ方である。北岡

氏は清沢の理念を評価し、理念の欠如した大衆は、大新聞を日米協調批判に傾かせることなどを通して日米協調破壊の二因を作ったと論じているが、それは果して事実であろうか。

筆者がこれまで兵庫県但馬地方などをフィールドとした研究（拙著『大正デモクラシーと政党政治』山川出版社、一九八七年の二部参照）や自治体史編纂を通して調査してきた結果によると、大衆は確かに一貫した理念に乏しく、日常は現実利益的で現状追隨の傾向が強いが、全体として当初から日米協調破壊の強い意志をもっていったとは思われない。日米協調破壊の元凶は、帝国大学や軍関係の学校出身の、清沢と対立する理念をもった各界のエリートインテリ層に求められるべきである。多くの大衆は理念の可否を考える余裕もなく日々の生活のために権力をもった彼らに追隨せざるを得なかったとみるほうが事実に近いのではないか。北岡氏が清沢の言動の真意を理解するため言論統制を考慮に入れた厳密な史料批判を行おうとしているのに対し、大衆の言動理解に対しては本格的なそれを伴った分析がなされていないのは片手落ちでは

ないかと思われる。

また清沢の活動で問題にされるべきことは、日米協調の理念の内容もさることながら、昭和恐慌に打ちのめされた大衆にどれだけの共感をもって又は共鳴を得られる方法でそれを論じたかではなからうか。本書の北岡氏の記述からはそれがうかがえないし北岡氏も特に問題としていない。大衆への共感の姿勢が弱いという点は、清沢が疑問を示した幣原喜重郎や同じ民政党内閣の中心閣僚であった井上準之助ら日米協調の理念をもったエリートインテリ層に共通して見られる現象である。むしろ日米協調破壊の理念をもったグループのほうが大衆の苦悩に共感を示す（少なくともポーズだけでも）傾向が強い。今後このあたりの問題も含めて政治が論じられるべきであろう。

本書を読んで、清沢が評論家として活動した時代について、北岡氏が体承だった政治外交史の著作を著すことを楽しみに思ったことを最後に記して筆を擱きたい。

（新書版 二〇二頁 一九八七年一月  
中公新書 五二〇四）  
（伊藤之雄 京都大学人文科学研究所非常勤講師）

日本学術会議では、特別委員会が追加設置され、活動を開始しました。また、現在第一四期（昭和六三年七月二二日より三年間）会員の選出手続きが進められています。今回の「日本学術会議だより」では、これらの概要に加えて、来年度に開催される共同主催国際会議及び研究連絡委員会報告等についてお知らせします。

◇マン・システム・インターフェース  
（人間と高度技術化社会）特別委員会  
日本学術会議は、昭和六二年四月の第一〇二回総会において新たに「マン・システム・インターフェース（人間と高度技術化社会）特別委員会」を設置した。

◇日本学術会議会員選出制度  
学術会議は、二一〇人の会員をもって組織されているが、その会員は次の手続きにより選出（推薦）される。現在第一四期会員（任期：昭和六三年七月二二日から三年間）を選出（推薦）するための手続きが進